

Albert Werner アルベルト・ヴェルナー (俘虜番号 3170 : 松山→板東)

出生 1892.04.18[Weißenfels]、死亡 1984.07.05[東京]。ザクセン州(Sachsen)メルゼブルク県(Merseburg)のヴァイセンフェルス(Weißenfels)、Saalestraße 22 で誕生。召集前は家具職人としてマイスターを目指し、諸国を遍歴し腕を磨く日々であった。1914.08.01 に召集され、海軍第3大隊工兵中隊2等工兵、のちに海軍第3大隊第2中隊に分属、第4歩兵堡壘配属された。

1914.11 より松山俘虜収容所に収容された(俘虜番号:3170、出身地:ヴァイセンフェルス)。松山時代の演劇活動では、山越地区の弘願寺でのシラー作の戯曲『ヴァレンシュタイン』で「砲兵下士官」役を演じた【森『松山俘虜収容所』に来たドイツ兵士たち(二)』26頁】。

1917.04.09 に板東俘虜収容所に移送された(第Vバラック6号室、板東俘虜名簿に出身地の記載なし。後に Weißenfels Saalestraße 22 と判明。生家と出生証明書の写真あり↓。板東時代に日本語を習得し、俘虜収容所医務室の通訳を務めた。1918年3月8日から19日かけて霊山寺及び門前の板東公会堂で開催された俘虜製作絵画と工芸品展で、「日本人の日」に通訳に当たった。やがて戦争終結しての解放まで、病院の一室にヨハネス・バルト(Johannes Barth)と一緒に住んだ。バルトが神戸の内外貿易に就職する際には通訳をした。

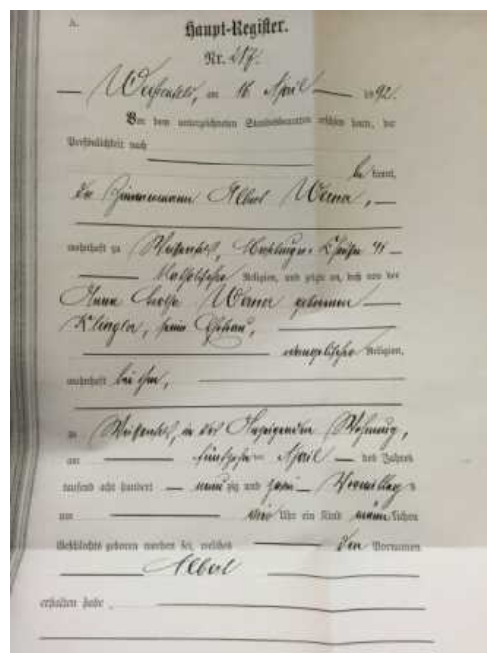
なお、Werner がどのように日本語を習得したのか、という疑問と興味が生じるが、孫の植田昌吾氏から次のような証言を得ている。

「捕虜の外出は大幅に認められていたと聞いています。外出により懇意になった民家の人たちは祖父にとっての良き日本語教師であったと聞いています。その他至る所にある看板、張り紙をこまめに書き留め、教材として活用したそうです。」

生家 Weißenfels Saalestraße 22 (岡田由記氏提供)



出生証明書 (同左)



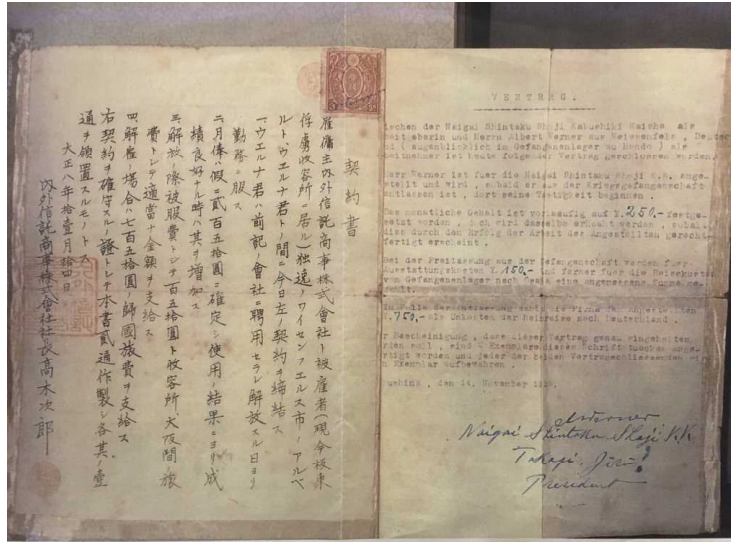
Werner が板東からドイツに出したハガキが残っている。よく読み取れないが、少なくとも筆跡は見て取れるので参考のため掲載しておく↓)。

板東収容所からのハガキ (H.-J. Schmidt 氏提供)



内外信託商事株式会社との雇用契約

(岡田由記氏提供)



1919.12 に解放。日本政府の手に職もつ捕虜の日本在留策で日本に残ることになり、月俸は 250 円*1 で大阪市の内外信託商事株式会社と契約 (1919 年 11 月 14 日付。写真あり↑)。

*1 内外信託商事株式会社の社長、高木次郎 (元々徳島市の素封家で四国の銀行家) との間に結ばれた契約書 (1919 年 11 月 14 日付) が残っている。それによれば、Werner の月俸は 250 円 (+被服費 150 円と大阪までの旅費) である。ちなみに当時の 1 円は、現在の約 3,000 円~ 4,000 円とされているので、90 万円前後と考えられる。

後に大阪で公文書翻訳の仕事を得て、その関係で大森キクノと出会い、1925 年に結婚。結婚後に上京。1925 年に東京丸の内ビルに貿易事務所 (Mercator Trading Co., Tokyo、丸の内ビルディング 775) を構え、中南米など多くの国に歯科医療機器を扱っていた。また東大医学部の教授陣に翻訳や通訳を提供していた。またこの間恐らく平行して、現在のさいたま市にあった京北高等歯科医学校でドイツ語を教授 (期間は不明。同校は 1927-1933 までこの名称。1933 からは京北歯科医学校の名称で 1946 まで存続)。戦時に強制送還になりそうになったが、東大教師を介し警察の支援を得て、1942 年に帰化を果たすことができた。

なお、Werner は 1935 年に歯科医語辞典を、東京高等歯科医学校教師の岡田平八郎との共著で出版している (写真あり↓)。詳細は以下の通り。

『歯科醫語辞典 獨・羅・和』 "Zahnärztliches Wörterbuch: Deutsch-Lateinisch-Japanisch"

刊行年 (月日) : 1935 年 12 月 10 日

著者 : アルバート・ウェルナー、岡田平八郎共著

発行元 : 萬国出版社 (東京市本郷区西片町 10 番 これは当時の Werner の住所なので、

この辞書を出版するために設立した出版社と考えられる)

以下は正木正（当時浪速高等学校教授、後京大教授）の記した序文より：

「著者の一人である Albert Werner は当時唯一の我が国での独文歯科雑誌の主幹であり、もう一人の岡田平八郎は東京高等歯科医学校の教員であった。・・・（Werner は）雑誌『日本之醫界』の独文欄を任ぜられていたことがあり、歯科学に関してはかなり精通せられている」

歯科医語辞典

写真は以下の HP より：

<http://ndu-rarebook.blogspot.com/2017/10/19.html>



以下は 1959 生まれの孫、渡邊則子氏（植田昌吾氏の従姉妹）の思い出である。

「祖父母の庭先に、祖父母の家とドア一つで行き来ができる家を両親が建て、4人兄弟の末子だった私は幼時からよく祖母に預けられていました。記憶の祖父は、有限会社スタンダード貿易という会社を祖母と二人で経営、南米向けに歯科治療器具の部品を輸出していました。食卓に細長い箱を並べて二人が梱包作業をしていたことを思い出します。」

遺影として撮影した顔写真（植田昌吾氏提供）



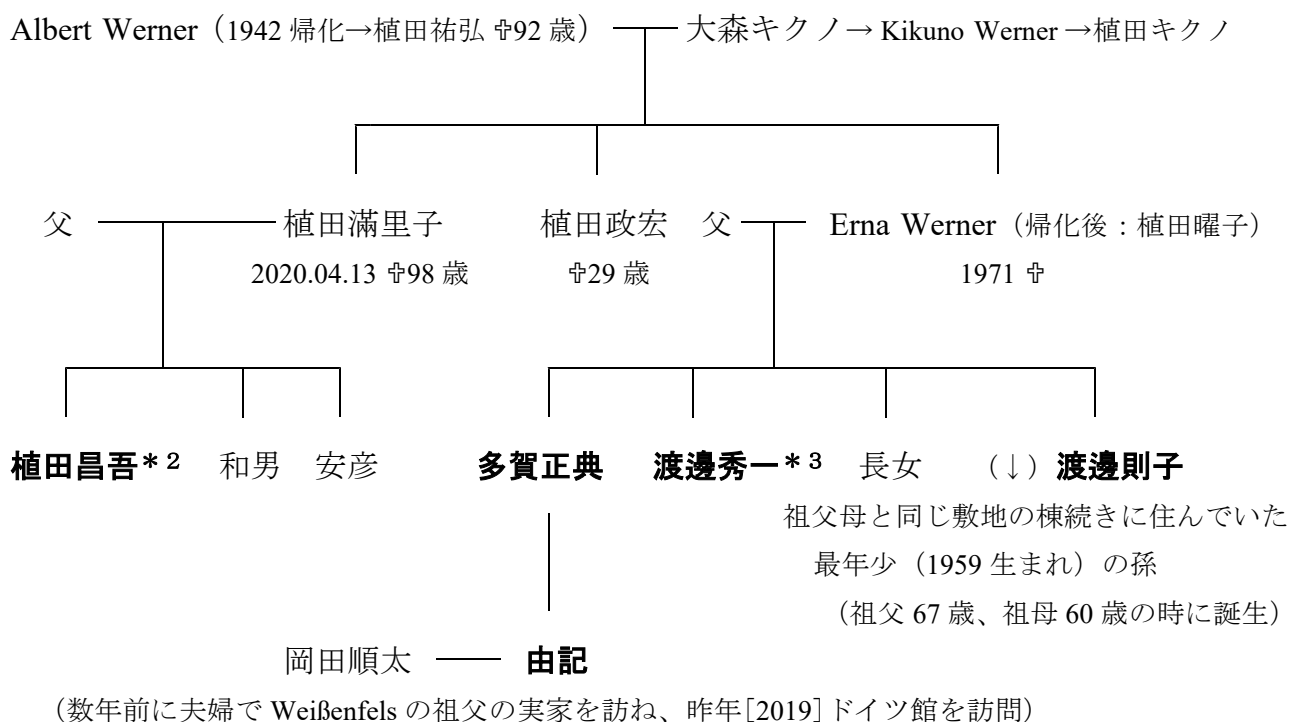
子供三人に囲まれた若き日の Werner（本郷区西片町在住時）（同左）



妻キクノと子供たちに囲まれて (植田昌吾氏提供)



【系図】 (敬称略、**太字**は情報提供者)



【参考】

*2 (↓)植田昌吾氏の「祖父、植田祐弘 の思い出」

http://koki.o.oo7.jp/A_Werner_Ueda.pdf

*3 (↓)渡邊秀一氏の「祖父 植田祐弘の思い出」

<http://koki.o.oo7.jp/A. Werner Watanabe.pdf>

※ この記事は、瀬戸武彦氏の俘虜名簿と H.-J. Schmidt 氏の Kurzbiographien の記事をベースにして、Albert Werner の孫である植田昌吾氏と渡邊則子氏などから多くの情報を得て、小阪清行がこれを纏めたものです。情報提供者の方々に感謝いたします。